

A市における「認知症を理解し地域で支える会」の取り組みに関する研究 —認知症高齢者の家族と医療・福祉職、地域住民が会に参加する意味—

Research on the efforts of “the Association of Understanding and Locally Supporting Elderly People with Dementia” in A City: the significance of participation of family caregivers of elderly people with dementia, the medical and welfare workers and local citizens

北村有香¹⁾ 横山浩誉²⁾ 小林貴子²⁾

Yuka Kitamura¹⁾ Hirotaka Yokoyama²⁾ Takako Kobayashi²⁾

キーワード：認知症，高齢者，家族介護者，地域，認知症を理解し地域で支える会

Key words : dementia, elderly, family caregiver, community, the Association of Understanding and Locally Supporting Elderly People with Dementia

【抄録】

本研究の目的は、認知症高齢者の家族と医療・福祉職、地域住民が「認知症を理解し地域で支える会」に参加する意味と会に参加する中で感じる困難を明らかにし、本会の今後のあり方を検討することである。会に参加した15人を対象とし、半構成的面接を行い質的に分析を行った。その結果、会に参加する意味として、【認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみを構築する場】【地域に密着したネットワークを住民と専門職が構築する場】【専門職としての役割・情報発信の場】【専門職として原点にかえる場】など9カテゴリーが抽出された。また、活動における困難として、【支援内容と方向性を見極め】【会の継続に向けた活動費の捻出や拠点場所の確保】など7カテゴリーが抽出された。以上のことから、参加者の会の意味づけは多岐にわたっていることが明らかになったほか、本会が認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみの構築に向けた取り組みの1つとして意義があると示唆された。また会の継続のためには、支援内容や今後の方向性を見極めることや運営資金の確保が課題であると考えられた。

Abstract

The purpose of this study was to clarify how significant it was for family caregivers of elderly people with dementia, for the medical and welfare workers and local citizens to participate in ‘the Association of Understanding and Locally Supporting Elderly People with Dementia’, and how difficult it was for the community to get going, and to consider in which direction the association should go. We had a semi-

1) 元・大阪医科大学看護学部 Formerly at Osaka Medical College, Faculty of nursing

2) 大阪医科大学看護学部 Osaka Medical College, Faculty of nursing

structural interview with 15 participants in the association and performed qualitative analyses. In result, as a meaning to participate in the association, 9 items were extracted such as [Establishing the system for elderly people with dementia to live at home], [Establishment of the community network by the citizens and the experts], [Giving the information from the experts], [Returning to the starting line as experts]. As the difficulty to get going, 7 items were extracted such as [Deciding the direction and content of support], [Securing of financing and the place for activity]. These results indicated that there were variety of purposes to participate in the meeting and such activity could have crucial role to create distinctive services based on the community needs and to establish the system for elderly people with dementia to live at home. In order to ongoingly carry out activities, it was supposed to be necessary to decide the direction and the content of the support and to secure the financing.

I. はじめに

わが国では、高齢者人口の増加に伴い、認知症の人の数も急増しており、「認知症高齢者の日常生活自立度」Ⅱ以上の高齢者は、2015年には345万人、2025年には470万人に達すると推計されている（厚生労働省，2014）。認知症高齢者の増加に伴い、在宅で介護する家族は長期にわたる身体的介護に加えて、認知症の行動・心理症状に対する対応の困難さなど多くの介護負担があると報告されており（丸山他，2005；小澤他，2005），家族介護者（以下，家族）への支援は重要な課題である。

1980年代頃より、認知症の人の家族の介護に関する悩みや負担を解決する目的で、地域の家族が自発的に運営する家族会が発足し、集いなどの活動が展開されている。松本ら（2011）は、家族は集いに参加することで、共通体験のある者同士が語る相互の交流から共感が得られたり、何でも吐露出来る安心が得られることを報告している。また、百瀬ら（2002）も、家族会が介護力を向上させ原動力を生み出すとしており、家族にとって家族会の果たす役割は大きいと考える。また、宮永（2006）は、医療・福祉職にある者が家族会に参加することは、本人や家族の心理・生活場面のアドバイスや慰めなどの役割だけでなく、医療・福祉に従事する者自身も認知症に対する理解が深まるなどの効果があるとしている。しかし、家族が家族会に参加する意味を明らかにした研究はあるが（松本，2011；大森，2007；松村，2001），そこに参加する医療・福祉職にとっての意

味を明らかにした研究や、家族と医療・福祉職などの専門職が共に参加する会の効果を明らかにした研究は見当たらない。

2008年にA市で発足した「認知症を理解し地域で支える会」は、認知症高齢者の家族や医療および福祉職のほか、認知症や会の活動に関心のある地域住民で構成された有志の会である。この会では、月1回の事例検討会や家族を対象とした相談・交流会を開催し、家族と専門職者および地域住民等が共に認知症ケアについて考え、解決の糸口を模索している。また、認知症高齢者とその家族が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるためのネットワークの形成を目指し活動している。このように本会は、家族としての思いや悩みを共有するピアカウンセリングの場である家族会の機能を持つだけでなく、認知症高齢者の家族と医療・福祉職、地域住民等が集い、共に認知症高齢者を地域で支えることを目指した新しい取り組みである。会の参加者は各々立場が異なっており、会への参加理由や会に対する思いも様々であると考えられる。しかしながら、様々なメンバーが集い情報交換や活動を行うことは相乗効果をもたらし、会の活動がより充実するのではないかと考えられた。本会は、認知症高齢者とその家族を地域で支えるための先駆的な取り組みであり、会全体としてどのような意味があるのか、またどのような可能性を持ち得ているのか明らかになっていない。認知症高齢者の家族と医療・福祉職が会に参

加する意味や会に参加する中で感じる困難を明らかにすることで、本会の意義や課題を検討することができるとともに、認知症の人とその家族を地域で支えていくための1つのモデルを提示することができる考えた。

そこで本研究は、認知症高齢者の家族、医療・福祉職、地域住民が「認知症を理解し地域で支える会」に参加する意味と会に参加する中で感じる困難を明らかにし、本会の今後のあり方を検討する基礎的資料にすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象者

A市における「認知症を理解し地域で支える会」(以下、会)の参加者のうち、本研究に同意の得られた15人を研究対象者とした。

2. 会の概要

会は、2008年に発足した有志の会であり、現在(2014年)の会員数は37名である。会員の内訳は、認知症高齢者の家族、医師、看護師、介護福祉士、社会福祉士、介護支援専門員、精神保健福祉士、行政職、大学教員、認知症や会の活動に関心のある地域住民などである。主な活動内容は、定例会議(月1回、支える会の全体企画や助成金申請等の検討)や事例検討会(月1回定例会議後)、専門委員会(月1回、情報交流・相談会や介護職員研修の企画・検討)、認知症高齢者とその家族を対象とした情報交流会(2～3回/年)や専門職を対象とした研修会(2回/年)の開催などである。定例会議および専門委員会は、会員の勤務する病院や大学の会議室を借用し、会員からの紹介などにより毎回10名～15名程度(会員以外も参加可能)が参加している。また、情報交流会や研修会(公民館や大学で開催)は、広報誌への掲載や事業所への案内状の配布等により、毎回50名程度の参加がある。なお、会は会費(1人あたり1000円/年)と助成金(不定期)で運営している。

3. データ収集方法

データ収集は半構成的面接で行った。面接では、会に参加するようになったきっかけや動機、参加して良かったこと、難しいと感じていることなどにつ

いて自由に語ってもらった。面接時間は1人につき30分～60分程度とし、面接回数は1人1回とした。面接は、プライバシーが確保できる場所で行い、面接内容は事前に研究対象者の許可を得て録音した。データ収集期間は、2012年11月～2013年9月であった。

4. データ分析方法

逐語録の内容から、対象者の「会に参加している意味」と「会に参加する中で感じる困難」について語られた部分をデータとして抜き出した。抽出したデータについて、できる限り対象者の言葉の意味を損なわないように、対象者の言葉を用いてコード化し、対象者ごとにこの分析を進めた。さらに、コードの意味内容の類似性や相違性を検討しながら分類し、複数のコードが集まったものに適したネームをつけて抽象度を上げていき、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。この過程においては、常にデータとカテゴリーを照合しながら、これ以上新しいカテゴリーの生成がないかを確認した。なお、分析の過程においては随時逐語録に戻り、分析結果が適切であるかを検討し、適宜修正を加えた。また、分析結果の信頼性と妥当性を確保するため、共同研究者間で検討を行った。

5. 倫理的配慮

本研究では、研究対象者に対し、本研究の目的、方法、プライバシーの保護、研究の協力を断った場合にも不利益を被ることは一切ないこと、途中で協力を拒否することができること、本研究のデータは個人が特定されるような取り扱いをしないこと等を口頭および書面で説明し、質問に十分に答えた上で、研究協力への意思を確認し、承諾書により同意を得た。面接は、プライバシーが確保できる個室で行い、本人の了承を得て面接内容をICレコーダーに録音した。なお、本研究は大阪医科大学倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の概要(表1)

対象者は、15人(男性6人、女性9人)であり、年代は30歳代5人、40歳代1人、50歳代4人、60

歳代3人,70歳代2人であった。会への参加年数は、1年6か月～4年であった。

2. 会に参加する意味（表2）

分析の結果、対象者が会に参加する意味に関するコードは134抽出され、29のサブカテゴリーと9のカテゴリーに分類された。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉で示す。また、対象者の代表的な語りは「 」,前後の文脈で理解しにくい箇所は（ ）内に言葉を補って示す。

1) 【認知症高齢者の介護に役立つ情報を収集する場】

会は認知症ケアに携わる様々なメンバーで構成されているが、「医療の方の先生方（医師）も来られていますよね。そやから、医療面的なこう、見解を聞けるのも、とてもプラスになってるなとは思っています。」というように、医師が参加していることで認知症の治療や薬剤の最新かつ具体的な情報を得ることができるなど、〈認知症に関する医学的な情報を得ることができる〉と感じていた。また、認知症に関する専門的な知識や技術だけでなく、「その（認知症介護を）やってはる人ならではのアイディアみたいな、その話が出てきたりして。」「認知症になったら大変やと思うんですけども、でも、ああこう

いう心の持ちようでちょっと楽になれたりもするのかなとか…」というように、〈認知症介護のコツや心の持ちようについて知ることができる〉と感じていた。他に、〈認知症高齢者と家族に役立つ社会資源について知ることができる〉があった。

2) 【認知症高齢者とその家族の本音やニーズを把握できる場】

会には、認知症高齢者を介護する家族も参加しており、介護の体験談を直に聞くことができる。「やっぱり、家族さんの生の声を聞くことができるっていう…」というように、〈認知症高齢者とその家族の本音を知ることができる〉と感じていた。また、「今、既存のその窓口は、なぜその人たちのところに届かないのかなって…（中略…）そういう問題は再発見させてもらいました」というように、〈認知症高齢者とその家族を取り巻く現状を知ることができる〉と感じていた。他に、〈認知症高齢者とその家族のニーズを知ることができる〉〈認知症に関する住民のニーズを知ることができる〉〈会の参加者の話を聞くことで、気持ちが楽になる〉があった。

3) 【会で得た経験が自身の仕事や活動に活かせる場】

会の参加者は、「そのこと（会で得た情報）を利用者さんに…（中略）…情報提供していけるってい

表1 対象者の概要

ID	性別	年齢	職種	家族会の参加年数
A	男性	50代	医師	4年
B	女性	50代	看護師	1年半
C	女性	50代	看護師	4年
D	女性	30代	市職員	4年
E	女性	40代	介護支援専門員	3年
F	女性	30代	社会福祉士	2年
G	男性	30代	介護福祉士	4年
H	男性	60代	家族	4年
I	女性	50代	介護職	4年
J	男性	70代	精神保健福祉士	4年
K	男性	70代	地域住民	4年
L	女性	60代	介護支援専門員	4年
M	男性	30代	大学教員・看護師	3年
N	女性	60代	家族	4年
O	女性	30代	精神保健福祉士・社会福祉士	4年

表2 会に参加する意味

カテゴリー	サブカテゴリー
認知症高齢者の介護に役立つ情報を収集する場	認知症に関する医学的な情報を得ることができる 認知症介護のコツや心の持ちようについて知ることができる 認知症高齢者と家族に役立つ社会資源について知ることができる
認知症高齢者とその家族の本音やニーズを把握できる場	認知症高齢者と家族の本音を知ることができる 認知症高齢者と家族を取り巻く現状を知ることができる 認知症高齢者と家族のニーズを知ることができる 認知症に関する住民のニーズを知ることができる 会の参加者の話を聞くことで、気持ちが楽になる
会で得た経験が自身の仕事や活動に活かせる場	会で得た経験を自身の仕事や活動に活かすことができる 会で得たことを自身の介護の参考にすることができる 地域住民としての役割を果たすことができる 会の取りくみ（相談会）の効果を実感できる
専門職としての役割・情報発信の場	専門職としての役割を発信する機会をもつことができる 専門職としてできる知識・技術を提供することができる
専門職として原点にかえる場	認知症高齢者と家族の本音を聞くことで、専門職として原点にかえることができる
認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみを構築する場	会の拠点であるA市の現状・地域性を理解することができる 認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみの構築につながる 既存のものでない、新たなものを作り上げることができる 認知症の人の権利・尊厳を守ることにつながる 幅広い年齢層の住民への認知症理解につながる 認知症を取り巻く現状に基づいた提供すべきサービスの方向性を見出すことができる
地域に密着したネットワークを住民と専門職が構築する場	認知症に携わる他職種の仕事内容や思いを知り理解を深めることができる 地域に密着した新たな人間関係の構築ができる 相談できるネットワークを組むことができる 様々な専門職と顔の見える関係ができる
自分自身の活動の場	自分自身の活動の場が得られる 今までの経験を提供し、自分なりの役割を果たすことができる
研鑽を積む場	認知症に関する知識・技術を高めることができる 自己研鑽を積むことができる

うので、すごく役に立っています。」と語り、〈会で得た経験を自身の仕事や活動に活かすことができる〉と捉えていた。また、専門的な知識だけでなく日々の介護に直ぐ取り入れることのできるような介護のコツを知ることができ、〈会で得たことを自身の介護の参考にすることができる〉と捉えていた。他に、〈地域住民としての役割を果たすことができる〉〈会の取りくみ（相談会）の効果を実感できる〉があった。

4)【専門職としての役割・情報発信の場】

会に参加する専門職者は、「訪問看護師としてこんな役割が担えますよっていうようなお知らせが発信できたらいいかなって」と、他職種や家族が参加している会の活動を通し、自身の〈専門職としての役割を発信する機会をもつことができる〉と感じていた。他に、〈専門職としてできる知識・技術を提供することができる〉があった。

5)【専門職として原点にかえる場】

認知症ケアに携わっている参加者の中には、「家

族さんの本音の思いとかを聞くのは、なんだか、原点にかえられるような気持ちが出て」「心の部分でぶれてはいけない部分をこの会が教えてくれている」というように、会の活動を通じ、〈認知症高齢者と家族の本音を聞くことで、専門職として原点にかえることができる〉と感じていた。

6) 【認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみを構築する場】

会の参加者はA市に在住もしくは勤務しているもので構成されており、会の活動を通し「A市での今の状態とか、今後こういうことをして行こうとしているんだなっていう…大雑把な現状が把握できたっていうのも、すごく大きなメリットではありますね。」というように、〈会の拠点であるA市の現状・地域性を理解することができる〉と感じていた。また、「自分自身、この地域でずっと暮らしていくにあたって、そうやって（認知症になっても）地域でできるだけ生活ができるっていう、そういうのを構築していくっていうのは、ひいては自分のためでもあると思っています。」というように、〈認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみの構築につながる〉と述べていた。さらに、「できることを提供するっていう今の形じゃなくて、ないものを作り上げるっていう…そういう発想を持てる会ではあるのだ」と、〈既存のものでない、新たなものを作り上げることができる〉と感じていた。他に、〈認知症の人の権利・尊厳を守ることにつながる〉〈幅広い年齢層の住民への認知症理解につながる〉〈認知症を取り巻く現状に基づいた提供すべきサービスの方向性を見出すことができる〉があった。

7) 【地域に密着したネットワークを住民と専門職が構築する場】

会には、家族以外に医師・看護師などの医療職、福祉職、行政職など様々な経験や思いを持った者が参加している。会の参加者は、「この方がこういう仕事をなさっていて、ここの事業所にいて、こういう思いを持っていらっしゃるんだなあということを知れることはすごく大きいと思いますね。」というように、〈認知症に携わる他職種の仕事内容や思いを知り理解を深めることができる〉と感じていた。

また、「直に生活されている方と接することで、新たに人間関係を構築しなおして、その中に、認知症の人も支えて行くっていう…すごい大きいことかなと思いますし。」というように、〈地域に密着した新たな人間関係の構築ができる〉と感じていた。さらに、「私自身が何か困った時にネットワークはとれた」というように、〈相談できるネットワークを組むことができる〉と感じていた。他に、〈様々な専門職と顔の見える関係ができる〉があった。

8) 【自分自身の活動の場】

会の参加者は「(会の中に)活動の場がある訳ですわ。実際に。」と会に、〈自分自身の活動の場が得られる〉と感じていた。また、職業として認知症ケアに携わっていたり家族の介護経験がある参加者は、「今まで少しだけでも経験したことを、・・・(中略)提供できて・・・」「(私も)微力ながら力になっていと思っています」と、〈今までの経験を提供し、自分なりの役割を果たすことができる〉と語り、会における自分自身の存在価値を実感していた。

9) 【研鑽を積む場】

会の参加者は、「私自身はそういう、専門的な知識は何もないんだけど、やっぱり、そこへ参加する事が、自分の、別に介護の仕事をしていなくても、色んなスキルというか、知識というか、そういう事が高められるしね」と、会に参加することで〈認知症に関する知識・技術を高めることができる〉と感じていた。また、「(会では)認知症ケアを実践している人から話を聞くことができるので、自分の勉強になっているし、ここ(会)に参加することで、認知症についてより深められている気はしますね。」というように、〈自己研鑽を積むことができる〉と感じていた。

3. 会に参加する中で感じる困難 (表3)

分析の結果、会に参加する中で感じる困難に関するコードは87抽出され、20のサブカテゴリと7つのカテゴリに分類された。

1) 【支援内容と方向性を見極め】

会のメンバーは、「もう少し段階を経てやっていかんと、あれもこれもあれもこれもいうことになる、どれもが結構やっぱり中途半端で尻切れトンボ

表3 会に参加する中で感じる困難

カテゴリー	サブカテゴリー
支援内容と方向性の見極め	会の活動内容が多すぎる
	会単体で支援を行う
	会のメンバーの思いが強すぎて整理しきれない
	会の今後の方向性や方針が明確でない
会の組織化と役割分担	会のメンバーの役割を分担する
	会を組織化すること
認知症高齢者とその家族に対する 適時・適切かつ継続的な支援の実現	集まる機会が限られており情報共有ができない
	会の企画がイベントで終わってしまっている
	認知症高齢者と家族に対するタイムリーな支援ができない
他団体・多職種との連携や協力	他団体の協力を得る
	多職種と連携すること
会の継続に向けた活動費の捻出や 拠点場所の確保	運営費を捻出したり確保すること
	専属スタッフを配置できない
	会の拠点場所がない
	会をどのように継続させるかということ
仕事と活動の両立	仕事と会の活動を両立させる
新たな参加者の確保と活動の周知	新たな参加者が増えない
	一般住民の参加が減り、専門職の会に移行している
	会の活動を周知していく

みたいになっていくかなというふうにね、思った。」というように、〈会の活動内容が多すぎる〉に困難を感じていた。他に、〈会単体で支援を行うこと〉〈会のメンバーの思いが強すぎて整理しきれないこと〉〈会の今後の方向性や方針が明確でないこと〉があった。

2) 【会の組織化と役割分担】

会の運営は一部のメンバーが担っているのが現状であり、「事務局に多大なる仕事量がかかっていて、その仕事量をなんとかみんなですべても分担できないものかということが一番思うんですね。」と、特定のメンバーに負担がかかっていることを心配するとともに、〈会のメンバーの役割を分担すること〉が難しいと感じていた。また、〈会を組織化すること〉を難しいと感じていた。

3) 【認知症高齢者とその家族に対する適時・適切かつ継続的な支援の実現】

会の定例会は月2回、事例会は月1回の開催であり、「なかなかやっぱりその頻回に会合が持てない

ということで、なかなか情報の共有化みたいなのでもできないし。」というように、〈集まる機会が限られており情報共有ができないこと〉に難しさを感じていた。また、会が開催している相談会や交流会についても、〈会の企画がイベントで終わってしまっていること〉というように、継続していくことの難しさが語られた。他に、〈認知症高齢者と家族に対するタイムリーな支援ができないこと〉があった。

4) 【他団体・多職種との連携や協力】

会のメンバーは、会の活動を続けていくにあたって行政や他団体との連携や協力が不可欠であると感じつつも、「団体に対してお願いをするときに、こういう有志の集まりですから、なかなかあの難しい面があるように思います。」と、〈他団体の協力を得ること〉に難しさを感じていた。また、〈多職種と連携すること〉があった。

5) 【会の継続に向けた活動費の捻出や拠点場所の確保】

会は有志の団体であり、運営資金は期限付きの助

成金等に頼らざるを得ないため、「期限が終わったら、また次のそういう助成金を目指してっていったところが、根本的に団体を支援するものではないので、そこは問題だなんていうふうに。」というように、〈運営費を捻出したり確保すること〉に困難を感じていた。他に、〈専属スタッフを配置できないこと〉〈会の拠点場所がないこと〉〈会をどのように継続させるかということ〉があった。

6) 【仕事と活動の両立】

会のメンバーは、仕事や介護をしている者が多いため、「業務が忙しいのもあって（会と）少し距離ができてしまっているなあっていうのも自分のなかでは感じているんですけど。」というように、会に参加したり運営に携わる時間を捻出するといった、〈仕事と会の活動を両立させること〉を難しいと感じていた。

7) 【新たな参加者の確保と活動の周知】

会のメンバーは、「なんか身内の絆が太くはなっているけど、新たな機関とか人材っていうものまではまだ行けていないのかなっていう印象ですかね。」というように、会のメンバーの結束は固くなっているが、〈新たな参加者が増えないこと〉を困難と感じていた。また、〈一般住民の参加が減り、専門職の会に移行していること〉というように、住民と専門職で構成している会の形が変化しつつあることを語っていた。他に、〈会の活動を周知していくこと〉があった。

IV. 考察

1. 会に参加する意味

参加者は会を、【認知症高齢者の介護に役立つ情報を収集する場】【認知症高齢者とその家族の本音やニーズを把握できる場】であると意味づけていた。大森ら(2007)は、認知症高齢者をかかえる家族介護者の「つどい」への参加の意味には、《情報》と《表出》があったと報告しているが、本研究で抽出された2つのカテゴリーは先行研究と一致するものであった。会には介護経験をもつ家族が参加しており、“介護のコツ”といった実体験に基づいたアドバイスや情報など、【認知症高齢者の介護に役立つ情報を収

集する場】となっていた。参加者は、〈認知症に関する医学的な情報を得ることができる〉と捉えていたが、これは本会には医師をはじめとする医療者が多く参加しており、受診時には聞くことのできなかった疑問などを家族が気軽に相談できる場になっていると考えられた。また、【認知症高齢者とその家族の本音やニーズを把握できる場】とも捉えており、このカテゴリーは多くの参加者から語られた内容であった。宮永(2006)は、医療や福祉職にある者が家族会に参加した場合、家族の心理・生活場面のアドバイスや慰めなどの役割だけでなく、困難な状態を乗り越えた人生の先達としての考え方を聞くことができ、家族＝先生、サポーター＝生徒の双方向な関係になるとしている。本研究でも、医療・福祉職である参加者は、家族介護者の悩みや思いといった生の声を聞くことで、家族介護者の現状やニーズの把握ができると述べており、会が家族介護者の思いを表出する場という一方向だけにとどまらず、双方向な関係になっていると考えられた。

さらに参加者は、【会で得た経験が自身の仕事や活動に活かせる場】と捉えており、会で得た認知症ケアに関わる内容が在宅での介護や病院・施設等における認知症ケアに役立つことを実感していた。また、「会で得た情報（生の声）をもとに仕事をしないといけないと思う。」とも述べており、当事者である家族の生の声を聞くことで、業務に反映しなくてはいけないという思いを強くし、積極的に認知症ケアに活かそうとしていると考えられた。このように会での経験が着実に日々の介護や業務に反映されると実感することは、継続して会に参加する要因にもなることが示唆された。

本研究では、会に参加する専門職者独自の意味づけが抽出された。会に参加する専門職者は会を、【専門職としての役割・情報発信の場】であると捉えており、認知症に関する知識・技術の提供や自身の職種を積極的に発信しようとしていた。このように、認知症ケアに携わる専門職者の役割や専門性を会で発信することは、家族介護者を含む地域住民と専門職者の相互理解が深まるだけでなく顔のみえる関係ができ、【地域に密着したネットワークを住

民と専門職が構築する】ための基盤づくりになっていると考えられた。また、「心の部分でぶれてはいけない部分をこの会が教えてくれている」というように会を、【専門職として原点にかえる場】として意味づけていた。我が国の高齢者介護施設に従事する介護職員に関する研究の中には、高齢者介護に携わる者の3割が高いバーンアウト状態にあるという報告がある(宗像, 1994)。また、現場介護職員は認知症高齢者の行動・心理症状への対応や事務業務に日々追われるなか、ケアについての評価もできずにジレンマを抱えて悩んでいる者が多く存在する(棚崎, 2007)とも報告されていることから、職員は自身のケアを振り返る余裕さえない状況であると予測される。このような状況下にある中で、家族の生の声を聞いたり認知症ケアに携わる多職種の想いに触れることは、自身の認知症ケアや専門職者としての自分を見つめ直す機会となることが示唆された。

本会は、認知症になっても住みやすい街づくりを目指したネットワークの形成を目的としている。本研究で見出された、【認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみを構築する場】【地域に密着したネットワークを住民と専門職が構築する場】は、この会の特徴を示していると考えられた。普段、認知症ケアに携わっている者でも、その事業所内でのケアで完結してしまう場合も多い。しかし、会に参加し地域で生活する家族や住民と交流することが、地域における認知症ケアを考えるきっかけになっていると考えられた。また、参加者の多くは同じ地域の住民でもあることから、自身の近い将来のことと捉え、積極的に認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみの構築に取り組もうとしていることが示唆された。

このように、会に参加する意味は多岐に渡っていたが、個々の介護や仕事のためといった個人的な目的で参加しているだけでなく、自分たちが暮らしている地域を認知症になっても住みやすい地域にしていくという大きなビジョンを持って参加していると示唆された。会の参加者は、会において主体的に自分のとるべき役割を形成しようとしており、「微力

ながら力になれていると思う」と自身の存在価値を見出すなど、【自分自身の活動の場】として会を位置づけていた。さらに、【研鑽を積む場】としても捉えており、認知症ケアや地域づくりに対する意識の高さが感じられたが、このような個々の主体的な姿勢が会を支える原動力や会の継続要因となっていることが示唆された。

2. 参加者が会に参加する中で感じる困難と今後の課題

会の発足から4年が経過し、会の参加者は活動の効果や手応えを感じる一方で、会の現状について様々な困難を感じていることが明らかになった。

会では、毎月の定例会や事例会以外にも家族に向けた相談会や情報交流会、認知症ケアに携わる介護職に向けた勉強会などを開催している。会の参加者は、活動が拡大し多岐に渡っている現状に一定の効果を感じつつも、支援内容の多さや会単体での支援といった【支援内容と方向性の見極め】が困難であると感じていた。さらに、会の活動が拡大しているものの、【会の組織化と役割分担】や【他団体・多職種との連携や協力】が出来ていないと感じていた。本会は、様々な立場や職種のメンバーで構成されていることが強みであるが、それゆえに個々の会に対する思いや考え方も多様であると考えられる。今後は、会のマンパワーや運営資金に見合うように支援内容を見直すことやメンバーの役割分担を行い、特定のメンバーに負担がかからない体制づくりをすることが望ましいと考える。また、会単体で全ての活動を続けるのではなく、今以上に地域の医療機関や事業所の保健・医療・福祉職や地域住民に会の活動を周知し、連携や協力が得られるようにすることが必要であると示唆された。会の組織化について鈴木(2008)は、グループを継続していく上での強みともなるが、会員との距離が遠のくとしており、今後どのように本会を組織化していくかが課題であるといえる。

会が行う支援の実際については、【認知症高齢者とその家族に対する適時・適切かつ継続的な支援の実現】が困難として挙げられていた。事例検討会は月に1回の開催であるが、当事者である家族はより

早い対応を望んでいる場合が多い。また、事例検討会の時点では状況が変化していることも少なくないなど、認知症高齢者とその家族に対し、タイムリーに支援することの難しさが浮彫になったといえる。前述の【支援内容と方向性を見極め】とも関連するが、会の活動として具体的にどのように支援をしていくのかを明確にするとともに、会議や事例検討会の持ち方についても見直す必要があると考える。

会の活動を継続していくためには、運営資金の確保は必要不可欠であるが、【会の継続に向けた活動費の捻出や拠点場所の確保】が困難として挙げられていた。現在、会の運営資金は財団等の助成金を獲得して活動している状況であり、定期的にこれらの助成を受けられる保証はなく、現行の活動を維持あるいは拡大していくうえで大きな障害となる。公益社団法人 認知症のひとと家族の会 (2011) は、「家族の会」など当事者組織を社会資源として位置づけ、活動に対する財政的、実務的な支援を強化することを要望しているが、本会のように地域で認知症ケアに取り組む団体も行政から支援を受けられるような仕組みが望まれる。さらに、会の拠点場所がないことも困難として挙げられていた。相談会や勉強会などを開催する毎に場所の確保に奔走する現在の状況では、会のメンバーの負担も大きく、また会の活動としても定着しづらい。従って、公的機関などから同じ会場を継続して提供してもらえるように会の活動への理解を広めていくなど、会の拠点となる場所を確保することが課題といえる。

会の参加者の多くは仕事や介護をしながら会に参加しており、【仕事と活動の両立】に困難さを感じていた。「仕事があるので(会の)運営にかかわることができない」「毎回出席することは難しい」など、会の参加は強制的ではないにもかかわらず、積極的に参加しようという姿勢がみられた。このことから、会には認知症ケアに大変関心が高いメンバーが参加していると考えられる。従って、各々の目的に応じて、負担に感じず気軽に参加できる場であることが望ましい。また、介護者が会に参加するためには認知症である家族を誰かに見守ってもらわないといけないという問題がある。既に相談会や交流会など

ではミニデイを併設し、介護者が家族とともに参加できるように工夫しているように、介護者が安心して参加できる仕組みを作ることも必要である。

会には専門職者が多く参加しているが、参加者は、地域住民の参加が減り、専門職の会に移行していると感じ、【新たな参加者の確保と活動の周知】が困難として挙がっていた。専門職者が主導の会になると、家族介護者は自身の介護を評価されているように感じ、参加しづらくなる可能性があることが指摘されている(牧野, 2012)。あくまでも家族を支援する会であるというスタンスをもち、家族や地域住民が会に参加しやすい雰囲気づくりを行う必要がある。地域で認知症高齢者を支える仕組みには「認知症の啓発」が必要とされている(木下, 2008)が、今後新たな参加者を確保するためには、広報を用いるなど、活動をより分かりやすい方法で地域住民に周知していく必要があることが示唆された。

V. 本研究の限界と課題

本研究は、1つの会の取り組みに限定した結果である。また本研究の対象者は、医療・福祉の専門職が多く家族や地域住民が少ないなど立場や職種といった属性に偏りがあることから、一般化することは難しい。また本研究は、会の参加者全体としての会の意味づけを明らかにしたが、参加者の立場や職種によって会の意味づけや活動における困難には違いがあると考えられた。従って、今後は対象数を増やすとともに、立場・職種間の違いも考慮し検討を重ねていきたい。

VI. おわりに

本研究の結果、以下のことが明らかとなった。

1. 「認知症を理解し地域で支える会」の参加者が会に参加する意味として、【認知症高齢者の介護に役立つ情報を収集する場】【認知症高齢者とその家族の本音やニーズを把握できる場】【会で得た経験が自身の仕事や活動に活かせる場】【専門職としての役割・情報発信の場】【専門職として原点にかえる場】【認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみを構築する場】【地域に密着

したネットワークを住民と専門職が構築する場】
【自分自身の活動の場】【研鑽を積む場】が抽出された。

2. 「認知症を理解し地域で支える会」の参加者が会に参加する中で感じる困難は、【支援内容と方向性の見極め】【会の組織化と役割分担】【認知症高齢者とその家族に対する適時・適切かつ継続的な支援の実現】【他団体・多職種との連携や協力】【会の継続に向けた活動費の捻出や拠点場所の確保】【仕事と活動の両立】【新たな参加者の確保と活動の周知】があった。
3. 会の参加者の会の意味づけは多岐にわたっていた。また、会の参加者は自分達が暮らしている地域を認知症になっても住みやすい地域にしていくという高い意識を持って参加するとともに相互理解を深めていることが示唆された。このように、様々な環境に身を置き、認知症ケアや地域づくりのノウハウを持ったメンバーが集い活動する本会は、認知症になっても地域で暮らすことのできるしくみの構築に向けた取り組みの1つとして意義があると示唆された。
4. 今後も会を継続していくためには、支援内容や方向性の見極めること、運営資金や拠点場所などの確保等が課題であると考えられた。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただきました対象者様の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 大森恵理子, 木村里世, 佐野由季他 (2007): 認知症高齢者をかかえる家族介護者の「つどい」への参加の意味—家族介護者のニーズに着目して—, 第37回地域看護学会論文集地域看護, 37, 240-242.
- 小澤芳子, 戸村成男 (2005): 認知症高齢者の介護者による介護評価. プライマリ・ケア, 28(3), 149-154.

- 木下敦史 (2008): 在宅介護支援センターからみた地域で認知症を支える仕組み 地域包括 支援センターの課題, 精神保健福祉, 39(4), 286-290.
- 公益社団法人 認知症の人と家族の会 (2011): 認知症の人も家族も安心して暮らせるための要望書, 2014年8月24日, <http://www.alzheimer.or.jp/?p=2337>
- 厚生労働省 (2014): 認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱ以上の高齢者数について, 2014年8月24日, http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r_9852000002iau1.html
- 鈴木美千代 (2008): 当事者組織の設立と発展要因についての一考察「札幌認知症の人と家族の会」を一例として. 北星社会福祉研究, 23, 49-60, 2008.
- 牧野史子 (2012): 家族を地域で支援するために, こころの科学, 161, 78-85.
- 松本啓子, 池田敏子, 羽井佐米子他 (2011): 在宅認知症高齢者の家族介護者が家族の集いに参加することの意味, The Journal of Nursing Investigation, 9(2), 9-14.
- 松村ちづか, 川越博美 (2001): 在宅痴呆性老人家族介護者にとっての家族会の意味—家族介護者の人生観・介護感・家族会へのニーズとの関連—, 聖路加看護学会誌, 5(1), 1-4.
- 丸山将浩, 丹治治子 (2005): 痴呆性疾患をもつ介護者における介護負担感と介護サービスの利用状況, 日本老年医学会雑誌, 42, 192-194.
- 百瀬由美子, 大久保功子 (2002): 小地域単位の介護者セルフヘルプ・グループに参加することの意味の発展プロセス, 老年看護学, 7(1), 52-60.
- 宮永和夫 (2006): 患者家族の心理的サポートを行う—特に外来および若年認知症の家族会などにおいて—, Cognition and Dementia, 5(2), 118-122.
- 宗像恒次, 川野雅資 (1994): 高齢社会のメンタルヘルス, 金剛出版.
- 棚崎由紀子 (2007): 認知症介護スタッフが直面する悩みとそのサポート, 認知症介護, 8(2), 48-53.